

山折 哲雄



「こころ」の戦後史、とい
ったことを話題にするときが
きているのかもしれない。そ
れはこころという言葉の変遷
史とも重なっている。
まず記憶にのこるのが、い
つごろからか「稲作」とい
かわりに「コメ作り」とい
うようになったしまった。秋の

実りを祝い楽しむかわりに、
車をつくるようにコメをつ
くる時代がやってきたのだとい
っていい。

その風潮ときびすを接する
ように広がっていたのが、食
べ放題、飲み放題の店の全国
展開だった。食べすぎ食べの
こしが日常茶飯のごことにな
り、ついに日本は残飯排出量

「こころ」の戦後史を語ろう 山折 哲雄

世界一の汚名をこうむるにい
たる。「腹八分」という大和ご
ころが死語と化す時代がはじ
まっていた。消費の選択がは
てしもなく広がり、使い捨て
と部品交換の意識に苦しむ人
間が、いろんな層に急激にふ
えていったのもそのころか。
そういえば、いつごろから
かツールとスキルといった言
語が流行りだしていた。どん
な道具をつかい、どのように
技術をアップさせるか、要す
るに、数値化されただけの目
標を立ててあくせくする。そ
れを追いかけるように、ハウ
ツーものの全盛期がやってき
たようだ。あわてたわれわれ
の社会は、物の豊かさにたい
する心の豊かさ、といったス
ローガンを口にするようにな
ったが、時すでにおそし。あ
とからやってきた次世代の子
どもたちはものごころがつき
はじめたころから、その物と
心がすでに分離してしまっ
ていることを知らされるはめに
なったのである。

責任転嫁を抜きに

「記憶だろうか。ひとこ
ろ「富国徳論」ということが
いわれていた。徳の力で経済
が豊かな国づくりをしようとい
う掛け声だったが、それも度
重なる世界的な経済不況のあ
おりで、あっというまにしほ
んでしまった。「二兎を追うも
の一兎をもえず、の実例であ
ったというほかはない。
考えてみれば、そもそもこ
ころという言葉は、宗教心、
道徳心、公德心といったよう
な熟語の形で用いられていた

のである。それが気がついて
みれば、心だけが切りはなさ
れ、離れ小島のように裸にさ
せられていた。このごろでは、
人間の心というかわりに、人
間力などという使われ方まで
が発明されている。

この現状をどうしたらよい
のか。まず「こころ」の戦後
における変遷史をたどること
からはじめるといい。つ
ぎに、責任を他に転嫁するこ
となく、まずはおのれの心の
内をふり返ってみることは
ないだろうか。(国際日本文
化研究センター名誉教授)

＊

山折さんが座長を務める
「こころを育む総合フォー
ム」(事務局)パナソニック
教育財団)は、全国の「ここ
ろを育む活動」実践例を募集
している(9月30日締め切
り)。問い合わせは事務局(☎
03・5521・6100)へ。